11月5日(木曜日)「ねたみによる不幸」

【新改訳 2017】

ルカ　15•25-32

「しかし兄は父にこう言った。『ご覧なさい。長年の間、わたしはお父さんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友達と楽しめと言って、子山羊一匹下さったことがありません。それなのに……。』」(29、30節)

放蕩息子のたとえの後半の部分の一節です。場面は変わって、放蕩息子の兄に焦点が当てられています。

兄は真面目な人で、忠実に父に仕えていましたが、律法主義的になっていました。身勝手なことをして帰って来た弟を、父が大喜びで迎えたことをねたみ、父に不快感をぶちまけたのです。しかし、父は兄息子の当然の権利を認めており、自分のものは全部お前のものではないかと戒めました。そして、弟息子について、死んでいたのが生き返って来たのだから、喜ぶのは当然であると諭しました。

ねたみは人を不幸にします。この兄はパリサイ人、あるいはユダヤ人を指すとも言われますが、先に救われて奉仕してい

るキリスト者にも起こり得る心ではないでしょうか。牧師が求道者や新しい信者に配慮しているのをねたむ類です。

～祈り～

主よ。主が自分に与えてくださっている恵みに感謝し、また、他の人への神の愛と祝福をも共に喜べる者としてください。

【学びのために】

ねたみ（嫉妬）とは、「うらやみ妬むこと、うらやみ憎むこと」です。「うらやむ」とは、他人と比較して自分もそうでありたいと思うこと。これもやはり、肉の心理の一面です。熱心な奉仕をしている人にも見られることがあります。